

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：34313

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07336

研究課題名(和文)中国・日本における『宗鏡録』の受容と展開

研究課題名(英文)The Zongjing lu in Chinese and Japanese Buddhism: The path to recognition and acceptance

研究代表者

柳 幹康 (YANAGI, Mikiyasu)

花園大学・文学部・講師

研究者番号：10779284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：中国と日本における『宗鏡録』の受容とその背景について分析した。具体的には以下の四種の作業を行った。

- (1) 宋代に編まれた『宗鏡録』の撮要本『冥樞會要』の訳注作業を進めた。(2) 中国宋代仏教界における『宗鏡録』の受容状況について分析を加えた。(3) 日本における『宗鏡録』の受容状況について分析を加えた。(4) 中国・日本における『宗鏡録』受容の相違とその背景について分析を加えた。

研究成果の概要(英文)：I have analyzed the circumstances surrounding the reception of The Zongjing lu 宗鏡録要 (Record of the Axiom Mirror) in China and Japan. My analysis consisted of the following four elements:

- (1) I am completing an annotated translation of the Mingshu huiyao 冥樞會要 (Essential Points of the Profound Axiom), a three-volume digest of The Zongjing lu compiled during the Song dynasty. (2) I have analyzed the circumstances under which The Zongjing lu came to be accepted by Song-dynasty Chinese Buddhism. (3) I have completed a similar analysis of The Zongjing lu's acceptance in Japan. (4) I examined the differences between how The Zongjing lu was received in China and how it was received in Japan.

研究分野：仏教思想史

キーワード：中国仏教 日本仏教 『宗鏡録』 撮要本 鎌倉・室町の禅

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する先行研究の状況

『宗鏡録』は五代の禅僧永明延寿(904—976)が唐代以前の多元的な仏教を統合して百巻にまとめた一大宗教書で、宋代以降仏教の正統説と公認され、歴代の大蔵経(仏教聖典集)に収められ続けた。このように中国仏教史上極めて重要な書物である『宗鏡録』に対し、国内外の研究動向は鮮やかな対比を為している。

国内では『宗鏡録』に言及することはあっても、それを直接の対象とする研究は殆どなされてこなかった。なぜなら日本の仏教研究は各宗派のルーツの解明に傾斜する傾向にあり、その著者延寿の属する法眼宗が伝わらなかった日本においては、『宗鏡録』が仏教学者の関心を集めることが殆ど無かったからである。

一方国外では中国を中心に『宗鏡録』乃至延寿の研究書が陸続と出版されている(郭延成『永明延寿“一心”与中観思想的交渉』、2012。孫勁松『心史——永明延寿仏学思想研究』、2013等)。近年では英語や韓国語でも専著が出版され、その研究は中国語圏外にも広まりつつある(Albert Welter, *Yongming Yanshou's Conception of Chan in the Zongjing Lu: A Special Transmission within the Scriptures*, 2011。朴仁錫『永明延寿『宗鏡録』의 ‘一心’ 思想研究』、2014)。管見の限り専著の数は16にも上り、単行の雑誌論文ともなると枚挙に暇がない。かくも『宗鏡録』が重視されるのは、同書が大蔵経に編入されたという前述の状況のほか、今日の中国仏教に直接つながる明末の仏教復興期において、四大高僧と称される著名な僧侶がみな『宗鏡録』を重んじたこと、清朝皇帝の雍正帝(在位1722—1735)が『宗鏡録』を中国仏教史上「第一の妙典」と絶讃したことなどが理由として挙げられよう。ただしこれらの研究では「禅浄一致」や「教禅一致」など後代の評価をそのまま用いて『宗鏡録』を理解するものが主で、その本来の思想を丹念に分析したものはあまり見あたらない。

(2) 本研究計画の構想に至った経緯

上述の研究状況のなかで報告者は、中国仏教思想史に位置づけて『宗鏡録』を通時的に理解すべく研究を行ってきた。それにより『宗鏡録』が禅の一心の思想に基づき諸宗諸教を一元的に統合した書物であること、それが宋代になると仏教界を席卷する禅僧により高く評価され大蔵経に編入されたこと、そして宋代以降、「禅—浄土」「教宗—禅宗」などの対立が前景化する度に「禅浄一致」や「教禅一致」といった理想像が『宗鏡録』に遡及的に読み込まれていったことが明らかになった。またその過程で、当時『宗鏡録』を読んだ高麗王が僧侶を派遣して延寿の下で学ばせたことや、日本でも『宗鏡録』が開板され、仏教はもとより文学にも影響を及ぼした

ことなどを知った。かくして『宗鏡録』が中国・韓国・日本の各地でそれぞれどのような背景で受容されたのかを分析することで、同書が東アジアで広く受容された理由、ならびにそれを受容した各地の仏教の多様性が明らかになると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は東アジア仏教全体を展望する巨視的な視座の確立を目指し、中国と日本における『宗鏡録』の受容とその背景について分析するものである。

『宗鏡録』は10世紀末に中国で成立した後、まもなく韓国・日本にも伝わり、各地の仏教に多大な影響を及ぼした。従来の仏教研究でしばしば前提とされる地域や宗派の枠組みにとらわれず、『宗鏡録』の受容状況を広く分析することは、これまで個別に為されてきた諸研究を有機的に連関させるのみならず、東アジア全域に及ぶ仏教のダイナミックな展開の解明にもつながる。そして受容の背景にも光を当てることで、同様に『宗鏡録』を受容しながらも、その後各地の仏教が異なる道を歩んだ理由の一端が明らかになるだろう。

3. 研究の方法

本研究では11-14世紀の中国・日本で成立した文献の読解に基づき、日中両国における『宗鏡録』の受容状況を比較分析する。

一次資料としては大正新脩大蔵経や大日本仏教全書など既存の仏教叢書のほか、近年刊行されつつある各種影印本、および各地の図書館に所蔵される刊本・写本を適宜参照する。

収集した資料の分析に際しては、仏教学のみならず文学・歴史学など関連する先行研究を広く参照することで、当時どのような時代背景のもと『宗鏡録』が受容されたのかを通時的に分析し、中国と日本における受容状況の異同を明らかにする。

本研究計画を申請した当初の研究計画は下記の通りである。

〈平成28年度〉

初年度は研究に必要な各種文献を広く収集する一方で、中国における『宗鏡録』の受容状況について分析を行う。具体的には以下の二種の作業を行う。

第一に宋代に編まれた『冥枢会要』の訳注を作成する。同書はその後中国・韓国・日本の各地で盛んに作成される『宗鏡録』撮要本の嚆矢であり、『宗鏡録』の受容を分析するうえで重要な資料である。

第二に中国宋代仏教界における『宗鏡録』の受容状況について分析を加える。申請者はこれまでの研究で、禅宗の圓悟克勤(1063—1135)や天台宗の普潤法雲(1088—1158)、在家信者の陳実(生没年不詳)など様々な人物がそれぞれの立場から『宗鏡録』の思想を

解釈・撰取していることを発見した(拙著『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』、2015、第4章)。同様の例は更にあると予測されるためその調査範囲を更に広げ、『宗鏡録』が当時の人々によりどのように受容されたのかを分析する。

〈平成29年度〉

二年目は引き続き資料の収集を行うとともに、日本における受容状況について分析を行う。『宗鏡録』は遅くとも11世紀には日本に伝わり、禅宗を中心に天台や真言などでも受容された。そこで便宜的に禅宗と他宗に二分し、それぞれの受容状況について調査を行う。

禅宗では栄西(1141—1215)・円爾(1202—1280)・夢窓疎石(1275—1351)の『宗鏡録』受容について順次検討する。栄西は日本臨済宗の祖とされる人物で、禅宗を日本に移植する際に『興禅護国論』を著し、そのなかで『宗鏡録』を引用し、自説の根拠としている。円爾は日本における臨済宗興隆の道を拓いたとされる人物で、当時の天皇や関白に『宗鏡録』を進講している。夢窓疎石は南北朝期を代表する禅僧で、『宗鏡録』を引用し、その総合的思想を重んじている。各時代の臨済宗を代表する三者がそれぞれどのような立場から『宗鏡録』を用いたのか、またその重点がどのように推移したのかを時代背景に照らし合わせながら分析することで、当時の禅門で『宗鏡録』が受容された理由と経緯が明らかになるだろう。

他宗における『宗鏡録』の受容については、全体を見通した研究はなく、断片的な情報が蓄積されているのみである。たとえば真言宗新義派の祖覚鑊(1095—1143)の著作には『宗鏡録』の引用が見え、法相宗の良遍(1194—1252)も円爾から影響を受け『宗鏡録』の思想を取り入れている。当該年度は同様の例を広く集め、禅宗以外における『宗鏡録』受容の全体像の把握を目指す。例が多く見つければ、当時の日本における『宗鏡録』受容が普遍的な現象であったことが分かるだろう。また例があまり見つからなければ、当時の日本仏教界における禅宗の特異性が明らかになるだろう。いずれにしても日本仏教思想の展開を見通すうえで重要な知見が得られるものと考えられる。

4. 研究成果

研究の進展状況に鑑み、当初は二年目に行う予定であった日本の鎌倉・室町期の禅宗における『宗鏡録』受容の分析を初年度に重点的に進め、二年目にはそれ以外の計画について順次研究を進めた。

〈平成28年度〉

(1) 栄西の『宗鏡録』受容について解明した。栄西の著『興禅護国論』には、『宗鏡録』の引用が計4例見える。関連する文献な

らびに当時の時代背景に照らして分析することで、以下のことが明らかになった。すなわち、『宗鏡録』が天台宗から受けた批判に反駁し、時を同じくして布教を禁じられた能忍(生没年不詳)の禅と自身の立場を峻別するための理論根拠として用いられたこと、また大蔵経の閲覧が困難な当時における教説の一大集成の書として『宗鏡録』が受容されたことである。以上の内容は後掲雑誌論文⑤において発表した。

(2) 円爾の『宗鏡録』受容について解明した。円爾の著と伝えられる『十宗要道記』、ならびに同時代の文献を比較分析することにより、『宗鏡録』が既存の諸宗との確執を解消し、禅宗の独自性を主張するための根拠として用いられていることが判明した。以上の内容は後掲図書④(共著)において発表した。

(3) 禅宗以外の『宗鏡録』受容についてその概要を解明した。平安末から室町にかけて著された諸宗の文献を調査し、当時『宗鏡録』が真言・浄土・法相・三論・律・天台・時宗など諸宗で幅広く用いられていたことを明らかにした。以上の内容は後掲図書③(共著)において発表した。

(4) またこのほかにも、『宗鏡録』の撮要本『冥枢会要』の訳注作成を進めたほか、『宗鏡録』の実践観や、『宗鏡録』の作者である延寿像の時代的変遷について分析を行った。加えて国内外の各種学会に参加して上述の研究内容に関する発表をした。

〈平成29年度〉

(1) 中国宋代仏教界における『宗鏡録』受容の一例として入宋僧裔然(938—1016)に着目し、彼が将来した釈迦立像の納入品線刻鏡に対し分析を加えた。裔然は平安中期の僧であり、入宋して釈迦立像を日本に将来した。その像には線刻鏡(菩薩の像を刻んだ鏡)が二枚納入されており、うち一枚は清聳(生没年不詳、『宗鏡録』の編者延寿の法系上のおじ)が収めたものである。これに裔然造像の状況を併せ考えれば、線刻鏡が延寿の提示する「宗鏡」(根本の鏡)を象徴する可能性が高いことを論じた。以上の内容は後掲図書②(共著)において発表した。

(2) 夢窓疎石の『宗鏡録』受容について解明した。夢窓は禅を核とする総合的な仏教思想を宣揚し、それを真理観・実践観の両面から根拠づけるものとして『宗鏡録』を用いている。そして『宗鏡録』は夢窓の没後もその門下において盛んに用いられていった。以上の内容は雑誌論文②において発表した。

(3) 愚中周及(1323—1409)の『宗鏡録』受容について解明した。愚中周及は南北朝期の禅僧であり、『宗鏡録』の撮要本『稟明抄』を編んだ。その全体の構成に鑑みて『宗鏡録』は、冒頭に掲げられる空と、巻末に示される心を結びつける役割——『稟明抄』一卷にひとつのまとまりを与える重要な働き——を

有していることを指摘した。以上の内容は雑誌論文①において発表した。

(4) 中国・日本における『宗鏡録』受容の差異とその背景について分析を加えた。中国において『宗鏡録』は宋代以降諸宗融合の道を辿る中国仏教にその理論的根拠を提供しつつ、それにともない『宗鏡録』に対する評価が急速に高まっていったのに対し、日本では伝来当初禅僧を中心に珍重されたにも関わらず、やがて人々の記憶から薄れていった。その要因の一つとして考えられるのが中日両国における王権の有り様の差異である。中国では宋代以降強力な王権が確立して諸宗融合の後ろ盾となったのに対し、日本ではそのような王権が成立せず、諸宗は分立の道を辿った。そのため日本では「諸宗統合の書『宗鏡録』」は忘れられてしまったのだと考えられる。以上の内容は雑誌論文③において発表した。

以上の研究成果は以下の四種に分類することができる。第一に、『冥枢会要』の訳注の作成である(28年度(4))。第二に、宋代中国仏教界における『宗鏡録』受容の分析である(29年度(1))。第三に日本の禅宗および他宗における『宗鏡録』受容の分析である(28年度(1)-(3)、29年度(2)(3))。第四に、中国・日本における『宗鏡録』受容の相違とその背景に対する分析である(29年度(4))。

うち第一から第三までは当初予定していた研究内容であるが、第四はそれをもとに新たに得られた知見である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①柳幹康、「愚中周及『稟明抄』と『宗鏡録』」、花園大学国際禅学研究所論叢、査読無し、巻13、2018年、頁1-20。
<http://ga.hanazono.ac.jp/pdf/013.pdf#page=7&zoom=100>
- ②柳幹康、「夢窓疎石と『宗鏡録』」、東アジア仏教学術論集、査読無し、巻6、2018年、頁271-293。
- ③柳幹康(著)・丁露露(訳)、「『宗鏡録』在中国と日本受容的異同及其背景」、東亜宗教、査読無し、巻3、2017年、頁83-94。
- ④柳幹康、「永明延寿的頓悟頓修：唐代禅宗修証論の継承和転化」、禅学、査読有り、巻45、2016年、頁43-82。
- ⑤柳幹康、「栄西と『宗鏡録』——『興禅護国論』における『宗鏡録』援用」、印度学仏教学研究、査読有り、巻65-1、2016年、頁516-510。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ibk/65/1/65_516/_pdf/-char/ja

[学会発表] (計8件)

- ①柳幹康、「愚中周及『稟明抄』と『宗鏡録』」、国際シンポジウム「東アジアにおける禅思想の諸相」、東洋大学白山キャンパス、2017年12月16日。
- ②柳幹康、「中国・日本における『宗鏡録』受容の異同とその背景(『宗鏡録』在中国と日本受容的異同及其背景)」、径山禅宗祖庭文化論壇、中国浙江省陸羽山荘、2017年11月10日。
- ③柳幹康、「夢窓疎石と『宗鏡録』」、第6回日・韓・中国国際仏教学術大会、東洋大学、2017年7月2日。
- ④柳幹康、「永明延寿的頓悟頓修」、韓国禅学会2016年秋季国際学術会議、韓国延世大学校、2016年12月3日。
- ⑤柳幹康、「『宗鏡録』に説かれる根本の鏡——奮然請来木造釈迦如来立像より発見された線刻鏡を糸口に」、第15回ザ・グレイトブッダ・シンポジウム(GBS)「日宋交流期の東大寺——奮然上人一千年大遠忌にちなんで」、東大寺総合文化センター、2016年11月27日。
- ⑥柳幹康、「唐代禅宗修証論与五代永明延寿」、仏教経研究学術研討会、台湾台北大学、2016年11月19日。
- ⑦柳幹康、「教判の展開——経典の体系化から一心への集約」、印度学仏教学会第67回学術大会パネル発表、東京大学、2016年9月4日。
- ⑧柳幹康、「栄西と『宗鏡録』」、印度学仏教学会第67回学術大会、東京大学、2016年9月4日。

[図書] (計5件)

- ①(共著)石井修道編集責任、臨川書店、『中世禅籍叢刊 第12巻 稀観禅籍集 続』、2018年。うち「『宗鏡録注解断簡』解題」を執筆(阿部泰郎・柳幹康)、頁747-754。
- ②(共著)GBS実行委員会編集、法蔵館、『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第15号 論集 入宋交流期の東大寺——奮然上人一千年大遠忌にちなんで』、2017年。うち「『宗鏡録』に説かれる根本の鏡——奮然将来釈迦立像に納められた線刻鏡に対する一考察」を執筆(柳幹康)、頁69-83。
- ③(共著)石井修道編集責任、臨川書店、『中世禅籍叢刊 第10巻 稀観禅籍集』、2017年。うち「『宗鏡録要処』解題」を執筆(柳幹康)、頁631-634。
- ④(共著)禅文化研究所編集、禅文化研究所、『『臨濟録』研究の現在——臨濟禅師1150年遠諱記念国際学会論文集』、2017年。うち「鎌倉期臨濟宗における『宗鏡録』の受容——円爾と『十宗要道記』」を執筆(柳幹康)、頁451-469。
- ⑤(共著)花園大学文学部監修、臨川書店、『三国伝来 仏の教えを味わう——インド・中国・日本の仏教と「食」』、2017年。うち第2講「一日不作、一日不食——イン

ドの戒律から中国禅宗の清規へ」を執筆
(柳幹康)、頁 63-100。〔その他〕⑳の講
演録。)

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

- ① (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 12 回 東アジア仏教の動向を映しだす鏡」、『花園』68-3、頁 11-13、2018 年。
- ② (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 11 回 日本における『宗鏡録』の受容」、『花園』68-2、頁 11-13、2018 年。
- ③ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 10 回 朝鮮における『宗鏡録』の受容」、『花園』68-1、頁 11-13、2018 年。
- ④ (講演) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡——東アジアにおける『宗鏡録』の成立と展開」、東京大学仏教青年会公開講座、2018 年。
- ⑤ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 9 回 後代の延寿像 (下) 調停者としての延寿」、『花園』67-12、頁 11-13、2017 年。
- ⑥ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 8 回 後代の延寿像 (上) 蓮宗祖師としての延寿」、『花園』67-11、頁 11-13、2017 年。
- ⑦ (講演) 柳幹康、「日本における臨済宗の展開と『宗鏡録』——栄西から夢窓門下の義堂周信まで」、臨済宗妙心寺派平成 29 年度四国東教区住職研修会、2017 年。
- ⑧ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 7 回 修証論 (下) 延寿にいたる思想の流れ」、『花園』67-10、頁 11-13、2017 年。
- ⑨ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 6 回 修証論 (上) 悟りへの道のり」、『花園』67-9、頁 11-13、2017 年。
- ⑩ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 5 回 仏教解釈論 (下) すべては悟りの契機」、『花園』67-8、頁 11-13、2017 年。
- ⑪ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 4 回 仏教解釈論 (上) 仏祖の視座」、『花園』67-7、頁 11-13、2017 年。
- ⑫ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 3 回 『宗鏡録』の対象読者と構成」、『花園』67-6、頁 11-13、2017 年。
- ⑬ (論文翻訳) 柳幹康訳、黄繹勳著「雪竇『開堂録』における臨済古則の意義」、『臨済録』研究の現在——臨済禅師 1150 年遠諱記念国際学会論文集』、頁 111-123、禅文化研究所、2017 年。
- ⑭ (論文翻訳) 柳幹康訳、Albert Welter 著「仏理学と臨済禅——宋代における仏教の再検討に向けて」、『臨済録』研究の現在——臨済禅師 1150 年遠諱記念国際学会論文集』、頁 313-327、禅文化研究所、2017 年。
- ⑮ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 2 回 『宗鏡録』編纂の時代背景と永明延寿の生涯」、『花園』67-5、頁 11-13、2017

年。

- ⑯ (講演録) 柳幹康、「悟る草花、教えを説くガレキ——インド・中国・日本の無情観」、『カールベッカー氏柳氏講演録』、頁 1-34、臨済宗妙心寺派宗務本所、2017 年。(本項⑲の講演録。)
- ⑰ (記事掲載) 柳幹康、「禅が伝える心の鏡 第 1 回 永明延寿の『宗鏡録』」、『花園』67-4、頁 11-13、2017 年。
- ⑱ (記事掲載) 柳幹康、「中国仏教思想史上における『宗鏡録』」、『中外日報』2017 年 2 月 3 日号 (第 28255 号)、頁 5、2017 年。
- ⑲ (講演) 柳幹康、「悟る草花、教えを説くガレキ——インド・中国・日本の無情観」、臨済宗妙心寺派特別布教研究会、2016 年。
- ⑳ (講演) 柳幹康、「一日不作、一日不食——インドの戒律から中国禅宗の清規へ」、花園大学 2016 年京都学講座「三国伝来 仏の教えを味わう インド、中国、日本の仏教と「食」、2016 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳 幹康 (YANAGI, Mikiyasu)

花園大学・文学部・講師

研究者番号：10779284

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし